

〔農場紹介〕

日本ハイポー(株) 山口農場

日本ハイポー株式会社 立石 雅 男

1. ハイポー豚におけるSPF化への取り組み

1) 目的

・育種選抜精度の向上

当然のことながら、育種会社において自分たちの育種商品を意図する改良方法へ正しく導くことは非常に重要なことである。

これは繁殖性、肥育性いずれにおいても言えることであるが、 P (表現型) = G (遺伝) + E (環境)の方程式は常に存在しており、 $P = G$ となることはない。 E は豚を取り巻くあらゆる環境を示し、疾病もこの中に含まれると考えてよい。

ハイポー豚におけるSPF化の目的のひとつはこの E の影響を最小限にとどめ、基礎豚群での育種選抜精度の向上を図ることにある。

・ハイヘルス化

ハイブリッド豚の多くはMD (Minimal Disease) 化を推進してきた。一貫生産農場ではMD化の考え方で特別の問題もなく経過してきたが、基礎群(ニュークレアス等)においてはある種の病原体が不在であることが要求される。

・顧客ニーズに応える

生産者に対しては衛生レベルの高い種畜を導入することによる生産性の向上を、バイヤーに対しては肉の販路の拡大を計る手段として、消費者に対しては安全な畜産物を提供すること。

以上がSPF化に取り組んだ大きな目的である。

2) SPF化の経緯

- ・平成8年5月：山口農場のすべての豚をアウトして改修工事にかかる。
- ・同年 7月：日本ハイポー(株)宮城SPF豚作出センターでSPF子豚を作出。
- ・同年 9月：SPF子豚を山口農場へ導入
- ・平成9年2月：繁殖豚として供用開始
- ・同年 6月：分娩開始
- ・平成10年1月：SPF-GP豚出荷開始
- ・同年 3月：SPF豚農場として認定を受ける。
- ・平成12年3月現在：

SPF-GGP認定農場1 (山口)

SPF-GP認定農場1 (鹿児島)

SPF-CM認定農場1 (鹿児島)

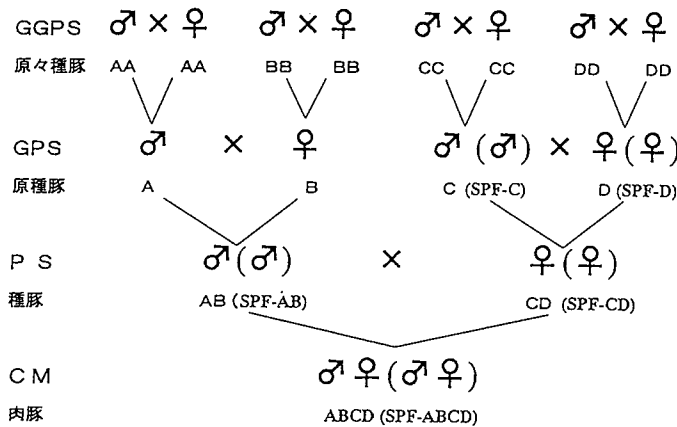
2. 農場紹介

1) 所在地：山口県玖珂郡錦町大字宇佐郷字下ノ原1964

2) 農場の概要

当場は山口県北東部の山間部にあり、昭和56年にハイポー原々種豚農場としてスタートした。

日本におけるハイポー豚の基幹農場である宮城農場とはデータベースでつながっており、さらにこれらの検定データはハイポー豚の育種会社であるオランダ・ユリブリッド社のホストコンピュータへ送られている。ホストコンピュータのデータベースには現在ヨーロッパと日本の



ハイポー生産プログラムにおけるSPF化の位置づけ

ハイポー原々種母豚20,000頭、検定豚250,000頭のデータが集められている。

これらの莫大なデータはBLUP法により繁殖性、肥育性の育種価を正確に推定している。したがって山口農場と宮城農場の育種改良は同時進行しており、山口農場はハイポーSPF豚の核としての位置づけである。

3) ハイポー生産プログラムにおけるSPF化の位置づけ

上図に示すように山口農場においては、雄系の原種豚AラインとBラインを持ち、止め雄のABラインを生産する。一方、雌系は原々種豚のCC雄とCC雌から原種豚のCラインを、DD雄とDD雌から原種豚のDラインを生産する。

4) 飼養規模と施設

飼養規模は母豚数120頭、農場面積は1.2ha、豚舎面積3,000㎡、農場レイアウトは右図のとおりである。

すべての原々種豚をSPF化するにはしばらくの時間を要すると思うが、ハイポーSPF原種豚農場をさらに増やすことでハイポーSPF種豚を広く普及させたいと考えている。

2) 閉鎖型SPF-GP農場

ハイポー豚は種豚だけでなく、その上の段階の原種豚も販売している。原種豚の段階から導入して肉豚生産まで行うことの利点は、単に低コストで種豚が生産できるというだけでなく、導入豚を介して病原体侵入の危険性が減少すること、馴致の必要性がないこと、更新率を上げることで生産効率が高まること等があげられる。

この原種豚がSPFであることは、さらにその後の生産に大きな利益をもたらすものとわれわれは期待している。

3. ハイポーSPF豚の今後の展開

1) 2つのピラミッド

現状ではハイポーの中でコンベンショナルとSPFの2つのピラミッドが存在する。

